

# 平成24年度県立高校における授業・学習状況調査結果に関して —中学生、高校生の学習状況分析と研修講座による授業支援—

福 嶋 洋 之

今年7月に全県立高校生を対象に「県立高校における授業・学習状況調査」（以降「高校生調査」と記す）が実施され、11月にはその結果が公表された。調査の目的は「高校生を対象に『学習と進路に関するアンケート』の調査を実施し、その結果を分析・活用することで、生徒の学習意欲の喚起、教員の授業改善および指導力向上、学校の運営改善等を図る」である。また内容は、

ア 家庭学習・生活に関すること

・家庭での学習時間や帰宅後の学習以外の過ごし方等

イ 授業や学習に関すること

・授業内容の理解度や授業に対する現時点での取組み状況（興味・関心度）等

ウ 進路意識・キャリア教育に関すること

・卒業後の進路志望や進路実現のために目標をもって努力しているか等

の3分野である。

一方、県内小学生・中学生を対象とした福井県学力調査（SASA：Student Academic Skills Assessment）は、昭和26年に始まりこれまで61回実施されている。現在調査目的は「県内の児童生徒の学習状況および学習と生活に関する意識や実態を把握するとともに、調査結果を分析することにより学習指導上の課題を明らかにし、学力向上に資する」であり、小学5年生・中学2年生に対して小学生4教科・中学生5教科の「教科別調査」とともに「学習や生活に関する調査」を合わせて実施し、対象児童・生徒の実態を明らかにし教科別調査と合わせて学力向上に資するための提言を行うための資料としている。

今回高校生調査の対象となった現在の高校1年生は、平成22年度に中学2年で第59次福井県学力調査を受験している。同様に高校2年生、高校3年生はそれぞれ平成21年度に第58次、平成20年度に第57次の福井県学力調査を受験している。

そこでこれを機会に、今回公表された高校生調査の結果と、それぞれの学年の高校生が中学2年時に受験した福井県学力調査「学習や生活に関する調査」（以降「県学力調査」と記す）での同じ質問項目について比較し、その変化を分析するとともに、調査結果から見えた課題に対して福井県教育研究所で開催する5教科の高等学校研修講座からどのように授業支援をしていくかについて記す。

## I 高校生調査結果と福井県学力調査(SASA)結果との関連について

今回の高校生調査の質問項目のうち、県学力調査「学習や生活に関する調査」での質問と同じ項目は少ない。また同じ質問であっても、回答の選択肢が異なっている。そこで、ここでは「学習時間」「各教科の理解度」の2つの質問項目に絞り、また選択肢の区分も可能な限り揃え比較・分析を試みた。

### 1 平日、休日の学習時間について [調査項目②③]

- ・高校生調査では全日制普通科系、全日制職業系、定時制の全集計である。
- ・両調査の回答選択区分が異なる（高校生調査では3時間未満では幅のない時間を選択肢にしているが、県学力調査では全て幅のある時間帯を選択肢としている）ため、下表のように対応させた。
- ・特に県学力調査では休日の学習時間は「土日を合わせて…」と2日分を合わせて質問しているので、

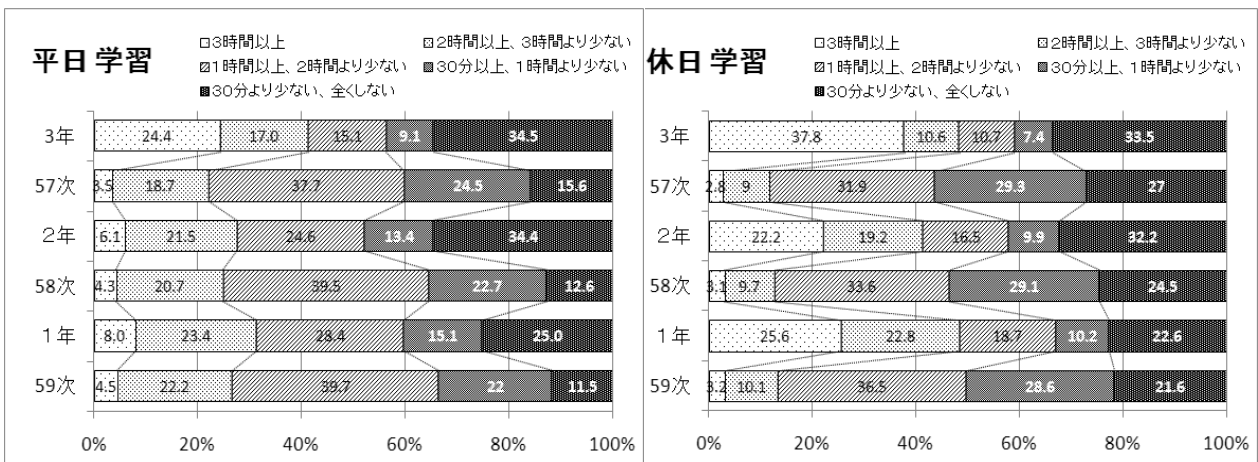
単純に2で割った時間とした。

↓ 平日の学習時間

高校生調査	県学力調査(中学2年)
(0)ほとんどしない	6 全くしない
(1)30分	5 30分より少ない
(2)1時間	4 30分以上、1時間より少ない
(3)1時間30分	3 1時間以上、2時間より少ない
(4)2時間	2 2時間以上、3時間より少ない
(5)2時間30分	1 3時間以上
(6)3時間～4時間	
(7)4時間～5時間	
(8)5時間～6時間	
(9)6時間以上	

↓ 休日の学習時間(ただし県学力調査は土日をあわせて)

高校生調査	県学力調査(中学2年)
(0)ほとんどしない	6 全くしない
(1)30分	5 1時間より少ない
(2)1時間	4 1時間以上、2時間より少ない
(3)1時間30分	3 2時間以上、4時間より少ない
(4)2時間	2 4時間以上、6時間より少ない
(5)2時間30分	1 6時間以上
(6)3時間～4時間	
(7)4時間～5時間	
(8)5時間～6時間	
(9)6時間以上	



(1) 平日の学習時間について

平日の学習時間に関して、まず明らかに言えるのは「中学校ではそれなりに全員が学習しているが、高校では学習する生徒としない生徒に二極化する」ということである。

2時間以上学習している生徒(5つの選択肢のうち上位2つ)の割合は、

22.2% (57次)	↗	41.4% (3年)	……	86.5%の増加率
25.0% (58次)	↗	27.6% (2年)	……	10.4%の増加率
26.7% (59次)	↗	31.4% (1年)	……	17.6%の増加率

いずれの学年でも長時間学習する生徒の割合は中学時より大きく増加している。

逆に学習時間が1時間より少ない(5つの選択肢のうち下位2つ)の割合は、

40.1% (57次)	↘	43.6% (3年)	……	8.7%の増加率
35.3% (58次)	↘	47.8% (2年)	……	35.4%の増加率
33.5% (59次)	↘	40.1% (1年)	……	19.7%の増加率

いずれの学年でも学習しない生徒の割合も中学時より大きく増加している。

また県学力調査が中学2年という固定された学年での調査であることを考慮すると、上記6つの増加率のデータから、特に高校2年生が高校3年間のうちで最も学習に消極的であると言える。

また、高校での3年間を見れば、2年生～3年生では「30分より少ない、全くしない」こそ変わらない(34.4% → 34.5%)ものの、やはり3年生では就職・進学のための準備が本格化することもあり、

「30分以上、1時間より少ない」	13.4% (2年)	↘	9.1% (3年)	……	32.1%の減少
------------------	------------	---	-----------	----	----------

から分かるように、あまり勉強しない生徒の割合は減り、逆に

「1時間以上」学習する割合は	52.2% (2年) ↗ 56.5% (3年) ……	8.2%の増加
そのうち「2時間以上」学習する割合は	27.6% (2年) ↗ 41.4% (3年) ……	50.0%の増加
そのうち「3時間以上」学習する割合は	6.1% (2年) ↗ 24.4% (3年) ……	300.0%の増加

となる。学習時間がかなり増加することが分かる。

(2) 休日の学習時間について

・休日の学習時間に関しても学習時間の二極化は顕著であるが、それ以上に言えるのは「中学校時以上に高校生は学習している」ということである。

・まず1時間以上学習している生徒(5つの選択肢のうち上位3つ)の割合は、

43.7% (57次) ↗ 59.1% (3年) ……	35.2%の増加率
46.4% (58次) ↗ 57.9% (2年) ……	24.8%の増加率
49.8% (59次) ↗ 67.1% (1年) ……	34.7%の増加率

・同じく2時間以上学習している生徒(5つの選択肢のうち上位2つ)の割合は、

11.8% (57次) ↗ 48.4% (3年) ……	約4.1倍の増加率
12.8% (58次) ↗ 41.4% (2年) ……	約3.2倍の増加率
13.3% (59次) ↗ 48.4% (1年) ……	約3.6倍の増加率

・さらに3時間以上学習している生徒の割合は中学時平均3.0%であったものが、高校1年生では25.6%(約8.0倍)、高校2年生では22.2%(約7.2倍)、高校3年生では実に37.8%(約13.5倍)となる。

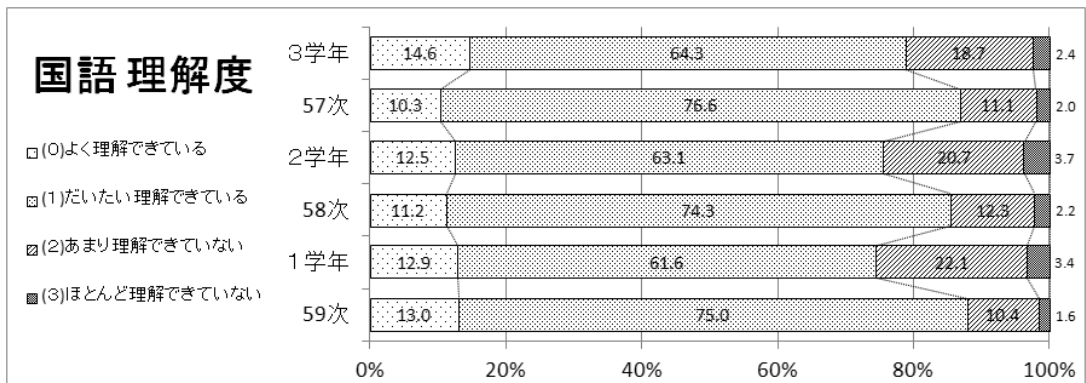
・全国の高校生の学習時間と比較しても、全く遜色のない状況であろう。

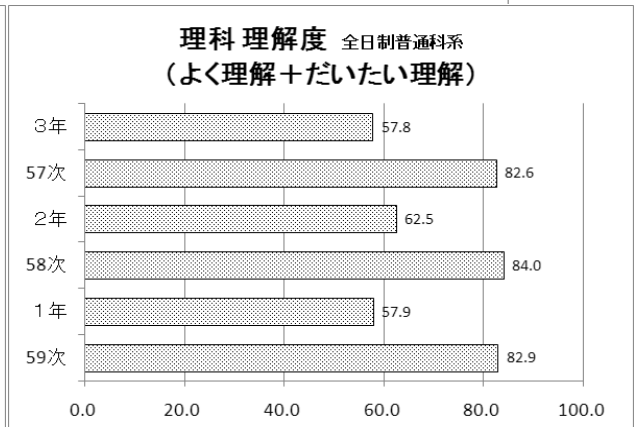
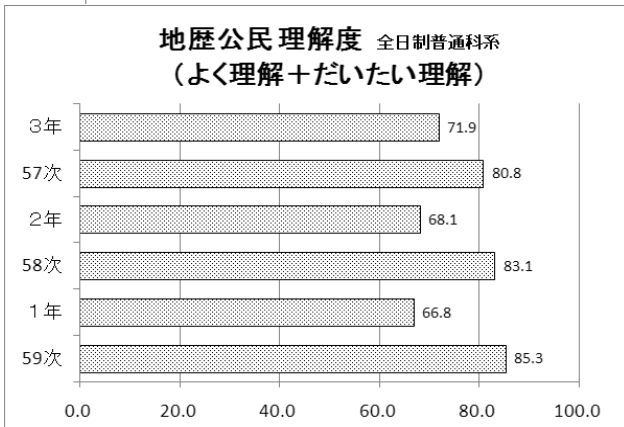
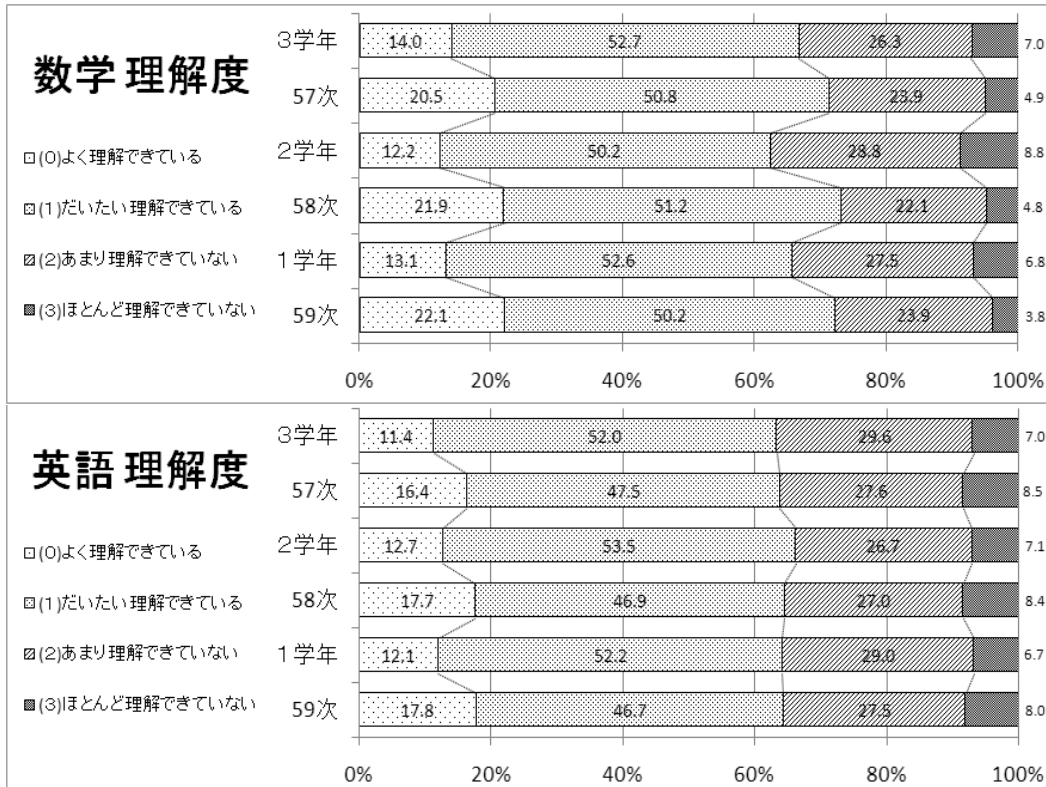
2 5 教科の理解度について [調査項目⑤]

・高校生調査の国語、数学、英語は全日制普通科系、全日制職業系、定時制の全集計である。また地歴公民、理科は全日制普通科のみの集計である。

・両調査の区分が異なるため、下表のように対応させた。特に県学力調査での選択肢3を単純に2で割って高校生調査の(1)(2)に加えるのではなく、選択肢3を、選択肢2と選択肢4の割合に分け、そのそれぞれを高校生調査の(1)(2)に振り分けて加えた。

高校生調査	県学力調査(中学2年)
(0)よく理解できている	1 よく分かる
(1)だいたい理解できている	2 だいたい分かる
(2)あまり理解できていない	3 分かることと分からないことが半分くらいずつある
(3)ほとんど理解できていない	4 分からないことが多い
	5 ほとんど分からない





(1) 国語の理解度について

- 「よく理解できている+だいたい理解できている」を理解度とすると、その割合は

86.9% (57次)	↘	78.9% (3年)	……	9.2%の減少率
85.5% (58次)	↘	75.6% (2年)	……	11.6%の減少率
88.0% (59次)	↘	74.5% (1年)	……	15.3%の減少率

高校生となり理解度は若干下がるものの、いずれの学年でも8割近くの生徒は理解できている。

- 特に「よく理解できている」の割合は県学力調査3年分の平均11.5%が、高校生調査3学年分では平均13.3%へ増加している。この増加傾向は他の教科には見られない特徴である。

(2) 数学の理解度について

- 「よく理解できている+だいたい理解できている」を理解度とすると、その割合は

71.3% (57次)	↘	66.7% (3年)	……	6.5%の減少率
73.1% (58次)	↘	62.4% (2年)	……	14.6%の減少率

72.3% (59次) \ 65.7% (1年) …… 9.1%の減少率

理解度の減少幅は国語と比較して若干少ないが、ほぼ同様である。

- ・「よく理解できている」の割合は、県学力調査3年分の平均21.5%から高校生調査3学年分では平均13.1%へ差として8.4%減少している。これがそのまま上記理解度の減少の理由であるといえる。

(3) 英語の理解度について

- ・「よく理解できている+だいたい理解できている」を理解度とすると、その割合は

63.9% (57次) → 63.4% (3年) …… ほぼ同じ  
 64.6% (58次) ↗ 66.2% (2年) …… 2.5%の増加率  
 64.5% (59次) → 64.3% (1年) …… ほぼ同じ

国語や数学と異なり、高校生となり理解度が下がることはない。

- ・しかし「よく理解できている」の割合は、県学力調査3年分の平均17.3%から高校生調査3学年分では平均12.1%へ、差として5.2%減少している。

(4) 地歴公民、理科の理解度について

- ・「よく理解できている+だいたい理解できている」である理解度の割合は地歴公民では

80.8% (57次) \ 71.9% (3年) …… 11.0%の減少率  
 83.1% (58次) \ 68.1% (2年) …… 18.1%の減少率  
 85.3% (59次) \ 66.8% (1年) …… 21.7%の減少率

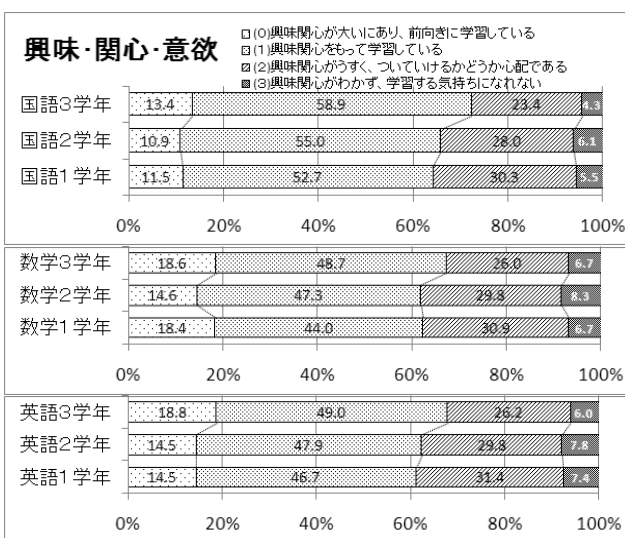
また、理科では

82.6% (57次) \ 57.8% (3年) …… 30.0%の減少率  
 84.0% (58次) \ 62.5% (2年) …… 25.6%の減少率  
 82.9% (59次) \ 57.9% (1年) …… 30.2%の減少率

- ・しかしこれは、県学力調査が全生徒対象、高校生調査は全日制普通科系のみの集計であることを考慮する必要がある。また、特に地歴公民では中学から高校へと理解度は下がるものの、高校では学年が上がるにつれ理解度は上昇している。

3 5教科の興味・関心・意欲について [調査項目⑥]

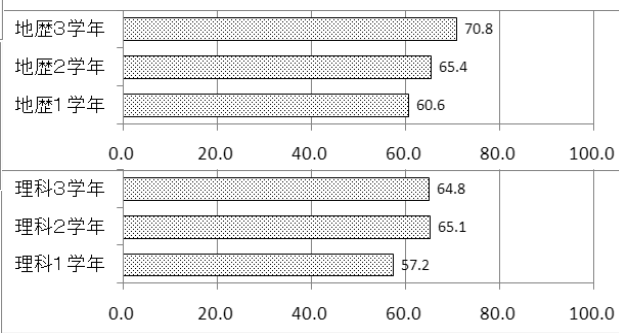
- ・興味・関心・意欲については、県学力調査では比較可能な該当項目がない。公表された値を記して



おく。

※ 値は5教科とも全日制普通科系の集計

※ 地歴公民、理科は選択肢(0)と(1)の合計値



## Ⅱ 教育研究所における来年度教職員研修講座（高等学校5教科）について

今回発表された「県立高校における授業・学習状況調査結果」の結果から、学習習慣については二極化などの問題はあるものの、一定程度学習に取り組んでいる状況がうかがえる。一方各教科での理解度や興味・関心・意欲などの具体的な状況については、高等学校における授業改善へ向けた更なる取り組みが必要である状況が浮き彫りとなった。そこで教育研究所で開催している高等学校5教科の教職員研修講座により、どのように授業改善を支援していけるかについて説明する。

### 1 高等学校国語科

調査によれば、国語科においても学習する生徒と学習しない生徒の差が拡大しており、二極化が進んでいる。学習する生徒についてはこれを維持・伸長するために、学習しない生徒についてはそれを減らし、学習に向かう意欲を喚起するために、授業改善が求められている。高等学校では平成25年度から本格実施される新学習指導要領においても「主体的に学習に取り組む態度を養うことに努めること」とし、「その際、生徒の発達の段階を考慮して、生徒の言語活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、生徒の学習習慣が確立するよう配慮しなければならない」とされている。

そのため、来年度の高等学校国語科においては、研修講座Ⅰで、文部科学省教科調査官を講師に迎え、言語活動を取り入れた、生徒が主体的に学習に取り組む授業の工夫について学ぶ予定である。従来の、生徒が講義を聴くだけの受動的な授業から、生徒自らが積極的に行動し、主体的に学ぶ授業への転換を図っていくための研修を目指している。また、この講座は、小中高3つの校種の合同講座であり、3つの校種が協力し合って、系統性のある授業を作り上げるための交流を図ることもねらいとしている。

一方、研修講座Ⅱでは、大学で研究している先生と県内の先進的な授業を実施している高校の先生（授業名人）を招き、「言語活動の充実と学力向上の二兎を追う授業の追求」と題した研修を実施する。こちらでも、研修講座Ⅰと同様に、言語活動を通して確かな国語力を育てる授業づくりを学び、具体的・実践的方法を身に付けることを目指す。

### 2 高等学校地歴・公民科

「県立高校における授業・学習状況調査結果」における全日制普通科系の地理歴史・公民科の特徴としては、次の2点が挙げられる。

- ①「理解度」も「興味・関心度」も学年が上がるごとに上昇している。
- ②3年では「理解度」も「興味・関心度」も70%を超えている。

上記の理由としては、1年次は全員の必修科目であるが、2年次より自らが選択した科目を学習すること、更に3年次は受験等を意識した進路目標や社会的関心が高まる精神的発達も関係していることと推測できる。

高等学校地理歴史・公民科の研修講座では、昨年度より生徒の「理解度」や「興味・関心度」を確かなものにするため、教員の授業力を向上する点が必要と考え、昨年度・本年度と2年にわたり「授業設計」を考える研修講座を実施し、アンケート結果も概ね良好であった。

「続いて、残る手立ては？」という観点から、来年度は「中高間の接続」を考える研修講座を計画している。来年度から学年進行で新学習指導要領が実施されていくため、全日制普通科系の1年で多く履修される公民科「現代社会」の「中高間の接続」への考察が柱である。

主な内容は、以下の通りである。

- ①中学校3年で学習する「公民的分野」と高校の「現代社会」の類似点を理解する。

（接続が容易になるよう設定され、中学校での学習内容が高校で生かされる形態となっている。）

- ②高校側の授業実践発表ではなく、高校側と中学校側とのパネルディスカッションを計画

③講師は前文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官

(地元の福井大学で教鞭を執られているため、本県の中学校社会科の実情にも通じている。)

以上より、中高間におけるギャップや意識の差が埋まるだけでなく、授業設計や教科指導力の向上が期待できると考える。

### 3 高等学校数学科

調査結果から見えることとして、まず理解度について約3分の1の生徒が「あまり・ほとんど理解できない」と答えている現状がある。しかし、学年別に見てみれば、1年生では「よく・だいたい理解できる」が65.7%であり、2年生の62.4%より3%以上高い。調査時期は7月であるが、今年度より始まった新学習指導要領に基づき、1年生対象である「課題学習」のような今までの講義型授業ではない活動型授業を積極的に取り入れていただいていることがその要因の一つではないだろうか。同じことは「興味・関心・意欲」についても言える。

つまり、これまでのような知識・技能の習得を目指した一斉講義で進める授業ではなく、数学的活動を取り入れた活動型の授業をまずは1年生より始め、これを引き続き来年度以降次の学年へとつなぐことで、更なる数学へ学習意欲を高め、取組み向上を推進することが必要であろう。

そのため、高等学校数学科研修講座では、以下の2講座を実施し、数学的活動を取り入れた授業構築に向けて先生方を支援していく予定である。

- (1) 研修講座Ⅰ……「ICTを活用した『データの分析』の指導」をテーマとして、ICTを活用した「データの分析」指導を学ぶとともに、他校の事例から授業設計を学ぶ。また、小中高を通した統計リテラシーの育成について研究する。
- (2) 研修講座Ⅱ……「高校数学における活動型の授業設計」をテーマとして、課題学習を中心に生徒自身が活動から学んでいく授業設計や、これまで実施された課題学習の指導事例などを研究し、指導力の向上を図る。

### 4 高等学校理科

新学習指導要領の先行実施を受けて、今年度の1年生から理科は新しい科目で授業を行っている。このことが、全日制普通科高校では他学年に比べ1年生で「理解度」や「興味・関心度」の数値が低くなっている一因と考えられる。

全日制普通科高校のほとんどは、物理基礎、化学基礎、生物基礎、地学基礎の4科目から3科目を履修するが、1年生では物理基礎または化学基礎を教育課程においている学校が多い。この2科目は、文系学部進学希望者には苦手な科目で、しかも数値を扱ったデータ解釈や計算が理解できない生徒も多い。また、これらの基礎4科目は標準単位数が2単位になり、内容を深め、時間をかけた指導が今年度は行いにくいと考えられる。さらに、高校理科教員には専門性があり、1年生の基礎科目を専門外の教員が指導し個々の生徒を把握する余裕がなく授業をしていることも考えられる。例えば、物理であれば、今年度から1年生で開講する学校では、昨年度は1年生での開講はなく、その増えた分の物理の授業を物理以外の専門科目の教員が指導している場合もある。

そこで、高等学校理科研修講座では、新学習指導要領に基づいて、それぞれの科目で日常生活との関連や中学校との系統性を図りながら、生徒の関心を高め理解を深める授業づくりの研修講座を、今年度は化学・生物分野で実施し、来年度は物理・地学分野で実施する。県内では、物理・地学を専門とする高校理科教員は化学・生物に比べ少なく、各研修講座とも1年生で基礎科目を担当している専門外の理科教員にも参加を促し、専門の教員とともに新しい科目の指導法や課題について講義を受け協議する講座を実施し、1年生の基礎科目の指導力を向上させたい。

## 5 高等学校英語科

調査から考察すると、「理解度」や「興味・関心」に関しては在学期間中に大きな変化はみられない。しかしながら、「今後、希望する学習内容」としては、発展的・専門的な内容を希望する割合が、学年が上がるにつれて増加している。これは、生徒たちが単なる知識集積型の授業を期待しているのではなく、知的好奇心の高まりの中で、英語によるコミュニケーション能力を身に付け、英語を理解したり、英語を用いての発信力を向上したりすることを望んでいることの現れであると考えられる。これを実現するためには、生徒自身が英語を積極的に使用するという言語活動を充実することと、教師自身が授業を英語で行うことの2つの視点からの授業改善が必要となる。高等学校英語科研修講座においては、この2つの視点を考慮し、以下2つの研修講座を用意する。

- (1) 研修講座Ⅰ……高等学校英語授業の改善を提唱されている講師をお迎えし、コミュニケーション能力育成の理論に基づいた様々な具体的な活動を学ぶことで、生徒と教師がともに英語を使う自然な状況を作り出すことを目指す。さらに、具体的な評価の方法についても考える。また、中高合同の講座とすることで、指導の一貫性を模索する。
- (2) 研修講座Ⅱ……学習指導の基本である教科書を利用し、その内容を適切な発問で深めていながら英語での自己表現活動へと発展させていく授業展開について学ぶ。1時間の授業内で、または複数の授業をリンクさせ、4技能（Listening、Speaking、Reading、Writing）に、生徒自身の「考える」こと（Thinking）を組み込んだ授業設計を考察し、生徒自身の「メッセージ」を生かした自己表現力を高める。

## Ⅲ おわりに

平成19年度より全国学力・学習状況調査が再開され、来年度6回目を迎える（平成23年度は問題配付のみ）。一部には依然としてランキングのみに注目した報道も見られるが、この学力調査の結果から県内児童・生徒の現状を分析し、更なる学力向上や授業改善などには大きな力となったことは明らかである。

今回実施された「県立高校における授業・学習状況調査」も、単に比較資料とするだけでなく、今後の教育活動に生かすことを明確にしておく必要はある。もともと個人で授業評価を実施してきた高等学校の先生方も多いと聞く（筆者自身も11年間続け、授業改善に役立てることができた）。この調査が、自らの授業を振り返るとともに、高校生の実態把握から様々な視点で学力向上を目指す一つの指針となることを願いたい。

《「Ⅱ 教育研究所における来年度教職員研修講座（高等学校5教科）について」執筆者》

- 富澤宏二（教科研修課）……高等学校国語科
- 濱田敏功（教科研修課）……高等学校地歴・公民科
- 福嶋洋之（教科研修課）……高等学校数学科
- 齋藤和秀（科学情報課）……高等学校理科
- 磯野和之（教科研修課）……高等学校英語科